IAUD Newsletter

No.5
2010.08

IAUD Newsletter vol.3 第5号（2010年8月号）目次

国際会議の準備もいよいよ大詰めをむかえ、論文セッションやIAUD活動紹介、展示内容など、次第に全体像が見えてきました。会場の規模や発表者の状態、テーマや形式などさまざまですが、会議のベースは参加者どうしのコミュニケーションです。多様な人々が参加する国際UD会議では情報保障が一つの重要なカギを握っています。費用の問題も大きいので主催者としても頭を悩ませるところですが、参加者も基本的な内容を理解し有効に活用することでより円滑なコミュニケーションが図れます。今月の特集では「会議での情報保障」をテーマとして取りあげました。

特集：*towards2010*

参加者のコミュニケーションを支援

〜国際UD会議での情報保障について〜

「第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議2006in京都」で提供された主な情報保障サーヴィス

IAUD 情報交流センター 蔦谷邦夫

前回、京都での国際 UD 会議では大変充実した情報保障が行われ、同会議の成功を支えた重要な要素の一つといえます。個別セッションを含め全ての会場において日英の同時通訳と字幕、手話通訳、磁気ループによる補聴援助システムのサーヴィスが提供されました。また、論文集は音声読み上げソフトに対応したデータが CD-ROM で提供されました。メイン会場ではＴＶカメラも使用され、スピーカーの表情や身振りが大スクリーンに投影されたことも会議参加者の理解を大いに助けていました。その４年前、2002 年の横浜での会議と比較すると格段の差がありました。これらのサーヴィスで健常者も含めた参加者の誰もが言葉や障がいの壁を越えてスムーズにコミュニケーションでき、会議の円滑な運営を支えました。

私が「情報保障」という言葉を知ったのは 2002 年の国際会議でしたが、翌年の IAUD 発足から約２年半の情報保障委員会の活動を通し、イヴェントの情報保障という視点で委員会や調査活動を行い理解を深めました。その間にも情報保障の考え方は次第に浸透し、最近では IAUD 以外のイヴェントでも普通に見かけるようになりました。

しかし、中小規模のセミナーやミーティングでは、障がいのある方が何の抵抗もなく参加できるという状況ではなく、まだまだ多くの課題が残されているようです。

今回の特集では情報保障について改めて考えるきっかけになればということで、前回の会議で提供された主な情報保障サーヴィスについて簡単にご紹介します。これらは決して障がい者のためだけでなく、健常者も含めた多くの人にも有用であり、情報の送り手と受け手がともに理解し考えていくべき課題といえます。

■同時通訳

多言語を前提とした欧米の国際会議では逐次通訳より一般的となっています。通例通訳者はブースと呼ばれる小部屋の中で作業を行います。通訳者の音声はブース内のマイクを通して聴衆のレシーバーに届けられます。京都の会議では赤外線でレシーバーに音声を送るシステムが使用されました。通訳者の負荷が大きいため、2 人ないしは 3 人が同時にブースに入り 15 分程度の間隔で交代します。より正確な通訳を行うためには、原稿概略や専門用語、使用図表などの事前提供、話者と通訳者の事前のコミュニケーションが大変重要となります。

■字幕システム

聞き取った話の内容を文字にしてスクリーンなどに表示するシステムです。京都の会議では2つの方式が採用されました。メイン会場で採用されたコンピュータによる音声認識技術を使用し、話者の言葉をオペレータがそのまま復唱し字幕化する同時字幕システムと、その他の会場ではパソコンを使って話の要点だけを入力するパソコン要約筆記のシステムが使われました。それぞれ長所・短所がありますが、いずれのシステムも、より正確に情報を伝えるためには、話者側もゆっくり明瞭に話すなどの配慮が必要です。字幕による文字情報は聴覚障害者だけでなく健常者にとっても話の理解の助けとなります。

■手話通訳・口話（読話）支援

手話については最近は非常にポピュラーになり、いろいろな場面で見かけることが多くなりました。手の位置や動き、顔の表情などで意思を伝達します。ろう者の生活の中から生まれ、大きく分けて独自の文法や語彙を持つ日本手話と日本語対応の手話の2種類があります。また、指文字は、五十音・アルファベット・数等を指の形で表すもので、手話の補足に使われます。長時間の手話通訳は疲労を伴うため、より正確な情報伝達のためには 15～20 分で交代するのが標準的です。ステージでは話者と通訳者の位置関係、説明スクリーン、字幕などの配置や通訳者への照明の当て方などの配慮も非常に重要です。1989 年にスタートした厚生労働省認定の資格を持つ手話通訳士は現時点で 2,643 名となっています。地域ごとのボランティア組織も多く、自治体などに派遣の窓口を設けているところも増えてきました。

聴覚障がい者のなかには口話（相手の唇の動を読みとる読唇を中心とした読話）のできる方もたくさんいます。そのような方にとってはTVカメラなどで話者の口元や表情をスクリーンに大きく映し出すことも、他の情報保障の手段に加えて話しの内容やニュアンスを理解する大きな助けとなります。また、パネルディスカッションなどでは誰が発言しているのかがより明確になります。このサーヴィスは健常者にとっても話者の表情や身振りがはっきり見えるため、話の内容をより深く理解するうえで有効といえるでしょう。

■補聴援助システム

マイクの音声を補聴器や人工内耳で聞きやすくするシステムで、磁気ループ方式や赤外線補聴システムが一般的です。補聴器も人工内耳も、直接耳で聞くように聞きたい声だけを取捨選択する機能がありません。そのため騒音など不要な音も大きくなり、遠くの音源やスピーカーを通した声を捉えにくいという欠点があります。補聴援助システムは、個人個人にチューニングされた補聴器にマイクからの音声を直接伝えるので、音源を耳元に近づけるのと同じ効果があり、聞きやすくなります。市販の補聴器の約8割が磁気ループ受信に対応しています。

■視覚障がい者の情報保障について

ここまで読んでこられて、情報保障の内容が聴覚を補うシステムあるいは音声を他の言語や文字、手話に翻訳するサーヴィスが中心となっていることに気づかれた方も多いと思います。会議では音声による言葉がコミュニケーションの中心となっているため、通常は情報保障もそれを補うところに主眼がおかれますが、視覚障がいの方にとってはスクリーンに映写されている写真や図表など、そのままでは伝わりにくい内容も多く含まれます。情報を提供する側の配慮としては、例えば音声読み上げに対応したテキストデータを Web や会場で事前提供するなども有効です。また、話す側も指示代名詞の使用や、画面の内容だけで説明することなどを極力避けるよう注意を払うことも大変重要になります。

■複数の情報保障サーヴィスが提供されるケースの場の問題

参加者は障がいの有無だけでなく、年齢や使用言語、文化的な相違などさまざまな人が来場されるため、一つの会場で複数の情報保障サーヴィスが提供されることが多く、それらの設置条件が相反するケースも少なくありません。そのためそれらの位置関係や照明環境など、空間的な配慮も大変重要な要素となってきます。例えば字幕システムと手話通訳が同時に提供される場合、字幕システムはビデオプロジェクターを使用することが多いため、できるだけ暗い環境が要求されますが、手話通訳者への適度な照明は不可欠です。また、字幕スクリーンも手話通訳者もできるだけ話者に近づけることが望ましいなど、複数の情報保障システムの条件を全体最適となるよう考慮することが重要です。これらは会場ごとに条件も異なるため、毎回、頭を悩ませるところです。

また、情報保障の側だけの問題ではなく、例えば聴覚障がい者の席をできるだけ手話通訳者や字幕スクリーンに近い場所に設けるとか、磁気ループを設置するエリアや車いすの方のためのスペースをどこに設けるかなども関連してきます。このような物理的な条件のほかにも、他の参加者の理解を得られやすい配置とするなど心理的な配慮や、案内をしやすい配置など会場運営を考慮することも必要な要素の一つです。

■新たな情報保障の可能性へのチャレンジ

以上、会場内での情報保障を中心に紹介しましたが、障がいを持つ参加者からはインターネットによる早期の情報提供、安心感のある伝達方法、空間的アクセスの配慮などに対する強いニーズもあります。また、最近では携帯電話や新しい携帯端末を利用した支援技術も開発されてきました。IAUD が主催する国際会議やイヴェントでは参加者の情報保障に対する期待も大きく、常に一人でも多くの人が参加しコミュニケーションできる場を提供していくことが、主催者としての重要な課題ととらえ、サーヴィス向上に取り組んできました。また、新しい技術の可能性を検討したり、試験的に導入してみるなど、国際会議という機会を活用して、よりよいサーヴィスを提供できるような取り組みも進められています。本誌の今年1月号の【UD2010 ウォッチング】でも少しご紹介しましたが、法廷記録で使用されている電子速記システムなどもその一例です。国際UD会議でも議論のテーマの一つになり、会議終了後に詳しくご紹介する予定です。その他にも携帯電話を活用した情報保障システムの可能性なども検討されています

■人、場、コミュニケーションスタイルに応じた適切な情報保障

ここでご紹介した情報保障がすべての会議やイヴェントで必要な訳ではありません。最も重要なことは、参加者の状況を予め理解しておき、参加者に応じて適切な情報保障サーヴィスが提供されることです。また、情報保障の内容は会場の規模や発表者と参加者の位置関係や配置形式、発表のスタイルなどによっても変わってきます。対面で対応できる展示会場などでは筆談なども有効なコミュニケーション手段です。また、サーヴィスを提供する側と利用

する側の相互理解や、会場に入る前の事前情報の提供やコミュニケーションが重要なことはいうまでもありません。

■会議の運営を支える人的ネットワークの広がり

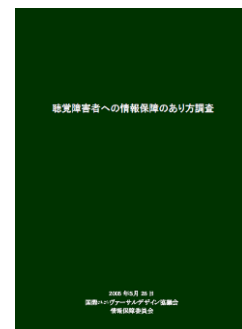
国際会議を一つのきっかけとするということでは、ここで紹介したようなシステムや場だけでなく、サーヴィスを提供していただく皆さんや新しいシステムを開発されている研究者の皆さんとのネットワークの広がりも大きな成果といえるでしょう。国際会議の運営を情報保障サーヴィスの提供を通じて支える方々は、ビジネスとしてサーヴィス提供する方以外に、多くのボランティア団体や研究機関の皆さんのご協力が大きな力となります。今回の会議の運営が検討される中で、そのような団体・機関の皆さんとの人的なネットワークも会議終了後の大きな財産として残るものと思います。この記事を読まれて国際会議に参加される方は、会議でのコミュニケーションをスムーズにするため、これら多くの皆さんが協力して支えられていることを心のどこかに留めておいていただければ幸いです。

■さいごに

情報保障は国際 UD 会議においては研究テーマの一つであると同時に、会議自体が実践の場であるという側面を持っています。最終的には人と人のコミュニケーションの問題なので、情報の送り手と受け手が一緒になって取組まないと解決しない課題です。UD と同様、終わりのないテーマといえますが、人の意識の変化や新しい支援技術の開発など、継続してより良い情報保障のあり方の研究やイヴェントなどでの実践に取り組んでいきたいと思います。

＜ご参考＞

2005 年度の情報保障委員会にて実施した「聴覚障害者への情報保障のあり方調査」については報告書をまとめ、すでに IAUD のサイトで一般公開しています。当事者の方々の生の声だけでなく支援技術など関連の情報も載せていますので、ぜひご参照ください。

http://www.iaud.net/udroom/archives/0507/15-215825.php

また、多様なユーザーを理解するためには今年2月に IAUD から出版した「IAUD UD マトリックスユーザー情報集・事例集」は大きな助けとなりますので、ぜひご活用ください。

http://www.iaud.net/udroom/archives/1001/28-185905.php

東京電力のユニバーサルデザインへの取り組み

～ 電気を大切におつかいいただくために ～

東京電力(株)販売営業本部
くらしのラボ所長　奥田 高子

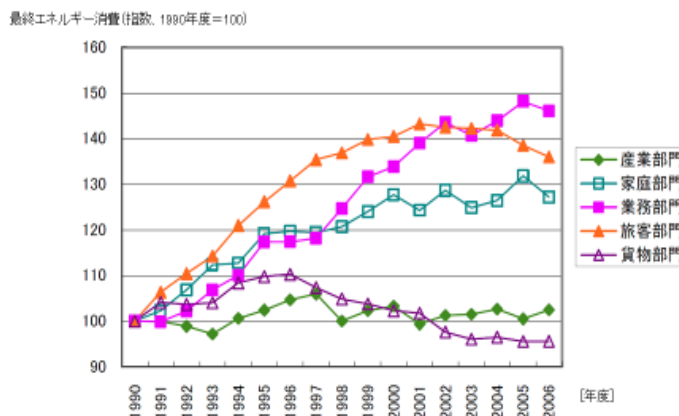
東京電力グループの経営理念は、「エネルギーの最適サービスを通じて豊かな生活と快適な環境の実現に貢献する」である。その基本は、電気を安全に安定的に供給することであるが、低炭素社会の実現が日本はもちろんグローバルにも喫緊の課題として取り上げられている今、電力会社として、「大切につくり、お届けする」だけでなく、電気を使っていただいているお客さまに、「大切におつかいいただく」ための様々なサービスや情報提供が求められている。「電気」という目に見えず、形のないものを商品とする東京電力にとってのユニバーサルデザインとは、毎日お使いいただいている電気というエネルギーを、お客さまのライフスタイルにあわせて、いかに快適、かつ、効率よくお使いいただくか、つまり、お客さまの毎日のくらしの中で、「電気」をどうデザインしていただくか、そのためのさまざまな取り組みがユニバーサルデザインへの取り組みであるという視点から、いくつかの事例を紹介したい。

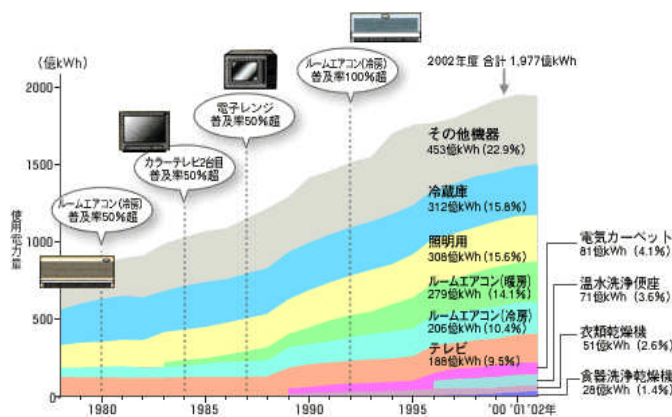
1．はじめに

日本の部門別のエネルギー消費（グラフ１）を京都議定書の基準年である 1990 年を 100 としてその推移をみると、産業部門はほぼ横ばいであるのに対し、家庭部門及び業務その他部門(＝民生部門)のについては、顕著な伸びを示している。その結果、CO2 排出量は、1990 年比＋1.6%増となっており、目標として定められている－６%には遠く及ばず、目標達成のためには、これまでの延長線上にない取り組みが必要とされている。

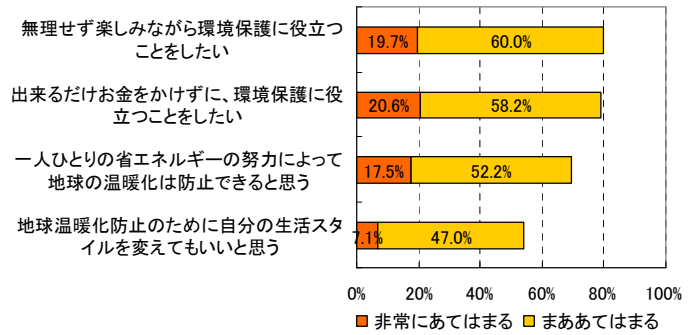
家庭用 CO2 排出量増加の一因は、「品目別家庭用電力消費の推移（グラフ２）にあるように、新しい機能をもつ家電の登場と、一世帯あたりの保有台数の増、つまり、生活者が快適さや便利さを求めてきた結果ともいえる。また、単身世帯の増加による世帯数の増も影響している。

一方、生活者の環境・省エネ意識に関する調査結果をみると、「無理せず楽しみながら」、「できるだけお金をかけずに」負担なく環境保護に役立つことをしたいという本音が見えるものの、一人ひとりの省エネルギーの努力により地球温暖化防止が可能と考え、そのた

<グラフ１>部門別エネルギー消費の推移

出典：経済産業省「総合エネルギー統計」2008年

<グラフ２>品目別家庭用消費電力の推移

出典：資源エネルギー庁「電力需給の概要」

めに生活スタイルを変えてもいいと思う方が５割を超えるなど生活者の環境・省エネルギーに対する関心の高さが伺える。
サステナブルな低炭素社会の実現に向けて、毎日のくらしの中で、電気をどう効率的かつ快適にお使いいただくが、そのための情報提供が求められている。

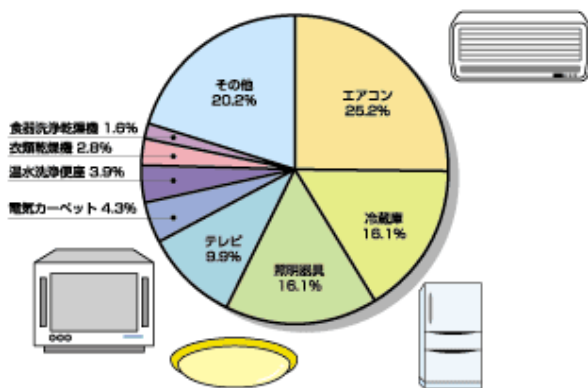
＜グラフ３＞生活者の環境・省エネ意識

（TOKYO LIFESTYLE 2010 2010.2月調査 N＝2，500人）

２. くらしのラボの取り組み

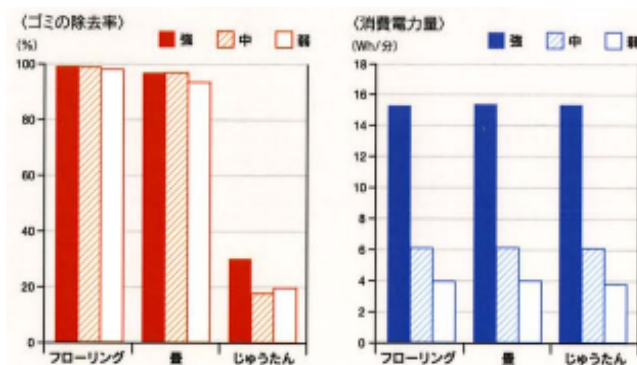
「電気は家電を通してお使いいただいている」のだから、東京電力の新しいサービスとして家電の上手な選び方・使い方を、最終製品の製造・販売をしていない公正・中立な立場で、ご提案することをねらいに、くらしのラボが設立されたのが 2002 年８月。新しい家電製品が次々と発売され、多機能化、大型化していく中で、お客さまから「何を基準に選んでよいのかわからない」、「複雑でなかなか使いこなせない」などの声が当社に多く寄せられたことも背景にある。

現在は、エコ家電ポイント制度などの政府施策もあり、消費電力量や省エネ性のグレイドなどがわかりやすく記載されているが、当時は、売れ筋ランキングや価格訴求がほとんどだったこともあり、お客さまのライフスタイルにあった家電を上手に選び、お使いいただくためのわかりやすい情報が不足していたのである。

以来、家電の中で消費電力の多いエアコン、冷蔵庫、照明（ランプ）、テレビの４家電に加え、ＩＨクッキングヒーター、食器洗い乾燥機、洗濯機、掃除機など家事と関わる 13 家電を対象にお客さまのライフスタイルや使い勝手にまでふみこんだ独自の試験・評価を、「省エネ性」と「快適性」の２つを軸に実施している。

＜グラフ４＞家庭における機器別消費電力量の内訳

出典:資源エネルギー庁『平成16年度電力需給の概要』

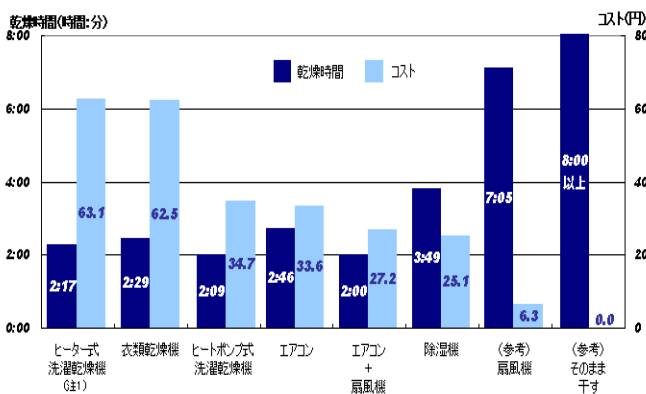
ア. 「使い方」による省エネ

＜グラフ５＞ 掃除機の吸い込みモードと床材の違いによるゴミの除去率と消費電力量

出典:東京電力「快適くらしガイド」
試験条件詳細は巻末参照＊1

どのご家庭にも必ずある掃除機。最近は、フローリングのご家庭が多いと思うが、掃除をする時のモードを伺うと、ほとんどの方が、「強」モードを使われている。吸い込みモードと床材の違いによるゴミの除去率と消費電力量の試験をおこなったところ（グラフ５）、フローリングの場合は、「強」モードと「弱」モードでゴミの除去率はほとんど変わらないが、消費電力量は、「弱」モードであれば、「強」モードの４分の１で済む。つまり、フローリングのご家庭では、

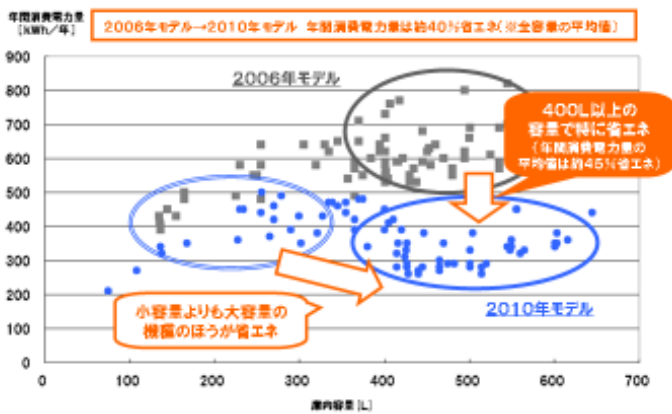
「弱」モードにするだけで、快適さを失わずに、省エネが達成されるというわけである。

イ．「選び方」による省エネ

＜グラフ 6＞梅雨時における室内干しの乾燥時間とコスト

出典：東京電力くらしのラボホームページ
試験条件詳細は巻末参照＊2

梅雨時以外も、花粉の影響や防犯上の理由で最近増えている「室内干し」。エアコンや洗濯乾燥機、扇風機や除湿機など使用家電ごとにかかる時間とコストを表したのが＜グラフ6＞。たとえば、扇風機を使うと、コストは最も安いが、乾燥に7時間以上かかる。一方、エアコンと扇風機の併用やヒートポンプ洗濯乾燥機を使用すると、コストはやや高くなるものの、2時間強で乾燥することがわかる。ほとんどのご家庭に設置されているエアコンを利用し、室内で乾燥させるのか、洗濯乾燥機を使用するのか、「洗濯物」を室内で乾燥させる時の機器の選び方は、お客さまの生活時間帯やスペース、洗濯物の量などのライフスタイルや重視点の置き方によって異なる。コスト(省エネ性)と時間(快適性)の両方のバランスから、ヒートポンプ洗濯乾燥機、エアコン、エアコン＋扇風機、除湿器の4つがオススメである。

ウ．「買い換え」による省エネ

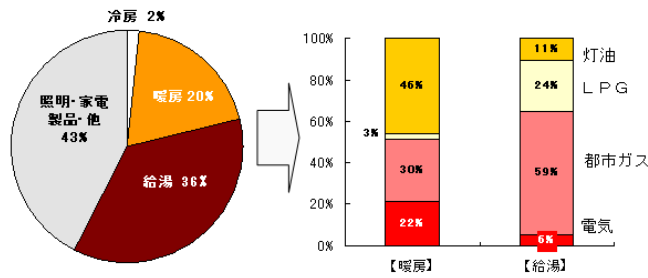
＜グラフ７＞冷蔵庫の庫内容量と年間消費電力の比較
（2006 年モデルと 2010 年モデル）

出典：東京電力くらしのラボホームページ
詳細は巻末参照＊3

家電エコポイント制度の対象製品でもある冷蔵庫の 2006 年モデルと 2010 年モデルのメーカーカタログに記載された年間消費電力量を比較すると（グラフ７）、平均で約 40%省エネになっており、特に 400 リットル以上の大容量の冷蔵庫の省エネが進んでいる。

経済不況や安全･安心志向を反映して、「内食化」が進む中、まとめ買いやつくりおきなどの増加により、大型化志向がみられるが、大型に買い換えても電力消費量が少なくて済むという安心感をお客さまに与え、選択肢の幅を広くしている。

以上、家電を上手に選び、効率的にお使いいただくために発信している情報の具体例をいくつかご紹介してきたが、一人でも多くのお客さまにこれらの情報がお届けできるよう、ホームページやマスメディアを通した発信とともに、『でんこちゃんのなるほど省エネ！なっとくＢＯＯＫ』に、そのエッセンスをわかりやすくまとめてパンフレットとして配布している。これも、電気をくらしの中で上手に、快適に使っていただくための取り組みの一つである。

３．オール電化への取り組み

＜グラフ８＞ご家庭における用途別エネルギー消費の割合

出典：家庭用統計エネルギー年報 2008

＜グラフ９＞エコキュート全国出荷台数累計

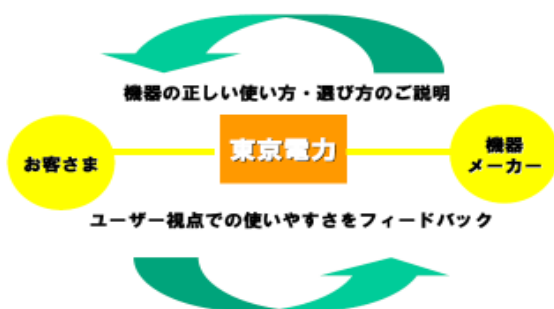
家庭の用途別エネルギー消費の割合をみると、これまで見てきた家電製品以外の「給湯」、「暖房」が約６割を占め、燃料種別にはその中でも灯油やガ燃料種別に見ると、ガスや灯油といった化石燃料が多く使われていることがわる（グラフ８）。この分野で大幅な省エネルギー・省 CO2 を達成する鍵を握っているのがヒートポンプである。ヒートポンプとは再生可能で無尽蔵な「空気の熱」をわずかな電気でくみ上げることのできる画期的技術であり、これを給湯機に生かしたのがエコキュートである。2001 年に開発されて以来、CO2 削減の切り札として普及が進み、2009 年度末には全国で 200 万台を突破した。官民一体となったなった取り組みのもと、2020 年における普及目標普及目標は約 1,000 万台とされている。

再生可能エネルギーである太陽光に加え、太陽の熱で温められた空気の熱を使って給湯をまかなうエコキュート、さらに、ＩＨクッキングヒーターのある厨房、暖房を、「電気」というエネルギーの力で賄い、人々のくらしに付加価値を生み出すようデザインされたものが「オール電化」である。「電化」により、より多くのお客さまに安心して、快適にくらしていただくとともに、CO2 排出量を削減し、低炭素社会の実現に貢献することがねらいである。

オール電化住宅は、東京電力サービスエリア内で、ストックベースで 70 万戸を超え、まだ全体の５％に満たない。各ショールームや年間 1,000 箇所以上のイベントなどでお客さまとの対話を大切にしながら、機器の選び方や使い方はもちろん、お客さまが疑問に思われていることに丁寧にお応えしながら、さらなる普及を図っていく。

４．ＩＨクッキングヒーター のユーザビリティ向上への取り組み

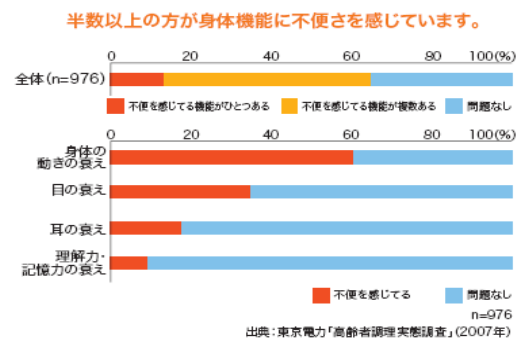
これまで、広義の意味合いで、電力会社におけるユニバーサルデザインへの取り組みについて述べてきたが、ここでは、オール電化の魅力的な構成要素の一つであるＩＨクッキングヒーターのユーザビリティ向上への取り組みについて紹介する。

ＩＨメーカーと東京電力の協力体制

「裸火がなく天面がフラット」ということで、お客さまからの注目度の高いＩＨクッキングヒーターは、2009 年度末での世帯普及率や約１３％を上回った(2010 年３月現在、東京電力調べ)。これまで、ショールームやイベント会場などでいただいたお客さまの声や、独自のユーザビリティ調査結果を行い、それらの結果をメーカーにフィードバックすることにより、ＩＨクッキングヒーターのユーザビ

リティの向上に結びつけてきた。
　また、普及率がまだ一ケタ台の５年前、目の不自由なお客さまから「ＩＨは視覚障がい者には使いにくい」とのご指摘をいただき、鍋の置く位置を確認できる補助シールを作成して対応した。これを機に、高齢者・障がい者の自立支援策の一つとして、ＩＨクッキングヒーターを使って安心して調理ができるよう、(財) 共用品推進機構をはじめとする福祉団体や筑波技術大学、山梨県立盲学校等の障がい者団体などの協力を得て行った調査・評価(調理実態調査と実機を使ってのモニタリング)をもとに、ＩＨクッキングヒーターのユーザビリティ基準の策定を行った。
　これは、障がいをもつ方たちにも使いやすいＩＨを、というねらいもあるが、グラフ 10 にあるように、65 歳以上の高齢者は、身体機能の衰えにより調理に対して不便を感じており、障がいをもつ方を被験者にすることで、広く、高齢者にとっても使いやすいＩＨの開発に結びつくと考えたからである。

肢体不自由者による実機の評価

＜グラフ 10＞高齢者の調理に関する不便さ
（65 歳以上の女性）

半数以上の方が身体機能に不便さを感じています。

　これらの調査結果をふまえ、『高齢者向けオール電化ガイドブック』を作成し、高齢者に好評なＩＨの機能を中心にご紹介をしている。パンフレットの表には、目の不自由な方にも電話でのお問い合わせをいただけるよう、点字表記をするなどの工夫をしている（図１参照)。

＜図１＞高齢者向けガイドブックとＤＶＤの製作

身体の不自由な方やお年寄りに対する配慮

高齢者向けオール電化ガイドブック
「『安心』できる住まいづくりのススメ」

DVD（字幕・ナレーション・手話対応）
「IHクッキングヒーターで快適キッチンライフ」

鍋位置確認シール

フライヤー（蓋付のザル）

　また、ＩＨクッキングヒーターの使い方のわかるよう、聴覚障害のある方にもお使いいただけるよう字幕入り・手話対応のＤＶＤの制作を行った。
　ＩＨクッキングヒーターメーカー各社も、取扱説明書として、点字版やＣＤ，映像を含むＤＶＤなどを製作するとともに、操作部の点字シール、記号シールや、高温になったグリルを誤って触らないようグリルガードを製作するなど、ＩＨクッキングヒーター本体だけではなく、実際の使い勝手を想定した、親切なツールを製作するようになってきている。
　このように、製品本体、ツール類など高齢者や障がい者が安心して使いやすいよう整備されてきたが、さらに大切なのはハード面での整備だけでなく、対象者に説明する時のご案内の仕方である。目の不自由な方に、鍋を置く位置を確認していただくために、身体の一部を尺度として使っての説明や、操作が今、どの段階にあるかという確認を指先でどうやるかという説明など、対象者の障がいの種類や程度にあわせた伝え方ができるスタッフを各ショールームに最低１名は配置するなどソフト面での整備を行った。以上のＩＨクッキングヒーターのユーザービリティ向上に向けての取り組みは、今秋の国際ユニヴァーサルデザイン会議で泉田より発表の予定である

＜図２＞メーカー各社による工夫

＜図３＞対象者にあわせた説明方法（例）

身体の一部を使った尺度がわかりやすい
（握りこぶし１つ分等）

操作状態の説明

指先の感覚や操作音、音声ガイダンス、
液晶画面等で操作の状態が理解できる

５．おわりに

東京電力におけるユニバーサルデザインの取り組みを、CO2 排出量の削減が喫緊の課題であり、生活者の関心も高いことから、電気というエネルギーを大切に使っていただくための取り組みという観点でこれまでの取り組みを中心に紹介させていただいた。電気自動車、蓄電池、スマートグリッドなど今まさに世の中は猛スピードで動いている。電気というエネルギーで、人々の生活をより豊かに、より快適にデザインし、それを誰にとってもわかりやすい形で提供することが、今後、ますます求められてくると考えている。

＊１　＜グラフ５＞の試験条件は、下記のとおり。
【試験期間】　平成 16 年 4 月～6 月
【実施箇所】　東京電力　技術開発研究所
【試験機種】　本体排気式：松下電器産業（現　パナソニック（株））　MC-F200NXM
【試験条件】　・ 試験ゴミは、鋳型用けい砂 65 号 17.5g＋鋳型用けい砂 200 号 17.5g（合計 35g）を使用しました。
・ 試験床[フローリング：松材（厚さ 15mm）、畳：稲わら構造、じゅうたん：ナイロン 100%／パイル長 7mm（タフテッドカット）700×1000mm]上に、ゴミ 35g を均一になるようにふるいにて散布しました。（じゅうたんの場合は、3.8kg のローラーで試験ゴミを埋め込みました）
・ クリーニングヘッドを同一方向に 1 往復させた後、クリーニングヘッドを右側に動かし再度往復しました。この手順で全試験領域を吸引しました。
・ 3 回試験を実施し、平均値を測定しました。
・ 消費電力量の測定は、ゴミを散布していない試験床を用い、クリーニングヘッドは同じ場所を往復させ、1 分間測定しました。
・ 吸引モードは、機種により異なるため、便宜上吸引力が強いと思われるモードより「強・中・弱」と表現しました。

＊２　＜グラフ６＞試験条件は、下記のとおり。
（注1）最新のヒーター式洗濯乾燥機は、ヒートポンプ式洗濯乾燥機と乾燥時のコストが同等の省エネ性の高い機種もあります。
（注2）エアコンによっては、「ランドリー運転モード」「衣類乾燥モード」が無い場合があります。ランドリー運転・衣類乾燥モードは、衣類の乾燥を優先させるため、室内の温度や湿度が変わる場合があるので、人のいない部屋での使用をおすすめします。
（注3）扇風機でも洗濯物を乾かすことはできましたが、扇風機では洗濯物からの湿気を取り除くことができず、室内が湿気ることがあるので、今回は参考情報としました。
（注4）機器を使用せずに、そのまま室内で洗濯物を干したところ、8時間経過しても洗濯物は乾きませんでした。
※ 本試験データは、当社の研究所にて実施した結果です。実施場所、外気温、湿度、天候などにより試験結果は異なる場合があります。

【試験期間】
2007年6月～7月:衣類乾燥機と扇風機単独の試験
2006年6月～7月:上記以外の試験

【試験場所】
東京電力技術開発研究所　住宅実験棟
※洗濯乾燥機および衣類乾燥機の試験は脱衣所にて、その他の試験は、6畳洋室にて実施。

【試験方法】
4.5kgの衣類を洗濯機にて、洗濯・脱水し、乾燥。
※エアコンは、「ランドリー運転モード」を使用。
※除湿機は「衣類乾燥運転モード」を使用。
※ヒーター式・ヒートポンプ式洗濯乾燥機は、洗濯、脱水後の衣類を投入して、乾燥運転を実施。
※室内は24時間換気を実施。

【衣類の種類と量】
合計4.5kg

種類	布材料	目安重量	数量
半そで肌シャツ	綿	130g	5
長袖Yシャツ	ポリエステル65%／綿35%	200g	6
バスタオル	綿	300g	2
スウェットスーツ	ポリエステル	500g	1
パジャマ	綿	500g	1
子供用半ズボン	ポリエステル65%／綿35%	200g	2
ブリーフ	綿	50g	3
ソックス	混紡（綿、アクリル、ポリウレタン）	50g	3
浴用タオル	綿	70g	5

【試験機種】
ヒーター式洗濯乾燥機:NA-V82
ヒートポンプ式洗濯乾燥機:NA-VR1000
衣類乾燥機:NH-D502
扇風機:F-CA322
以上 松下電器産業（株）（現パナソニック（株））
エアコン:MSZ-ZXV22P-W 三菱電機（株）
除湿機:RD-80TX 日立Ｈ＆Ｌ（株）（現日立アプライアンス（株））

【試算条件】
・電気料金：22.86円/kWh（税込）
東京電力「従電灯Ｂ」第2段階料金（2009年4月）
・水道料金：228円/m3（税込）[内訳：水道料金128円/m3（税込）、水道使用料100円/m3（税込）]　（社）日本電機工業会調べ

＊３　＜グラフ７＞の参考カタログは下記のとおり。

【参考カタログ】
・パナソニック（株）（当時　松下電器産業（株））、三菱電機（株）、日立アプライアンス（株）、シャープ（株）、東芝ホームアプライアンス（株）（当時　東芝コンシューママーケティング（株））、三洋電機（株）のカタログ（2006年11月、2010年7月）
・グラフ化した機種は、以下の条件を満たすものとしました。
①家庭用冷凍冷蔵庫であること　②冷気強制循環形であること　③在庫限りの商品でないこと・切替室をもつ冷蔵庫については、冷凍設定時の値とし、周波数は50Hz時の値を採用しました。

Case study：住空間プロジェクト
「夢のみずうみ村山口デイサービスセンター視察レポート」

宮脇 伸歩　株式会社 INAX

2009年4月号のニュースレターでもご紹介しましたが、住空間プロジェクトでは、誰もが心豊かに暮らせる「楽しいUD」を実現する住空間づくりを目標に活動しています。いままでのUDやバリアフリーの概念から一歩進んで、心身の機能低下を防ぎ、むしろ向上させるデザインという新たなUD コンセプトを目指しています。住空間プロジェクトではこれを「UD プラス」と名づけ、デザインの仮説検証を行う「UDプラス」チームと、世の中の様々な事例を視察し体感する「新空間」チーム、それらの経験を共有し定着させる「ワークショップ」チームで活動を行っています。

今回は、まさに「ＵＤプラス」を実践している事例として、山口県の「夢のみずうみ村 山口デイサービスセンター」をご紹介します。

夢のみずうみ村代表の藤原茂氏の熱い思いで作られたこの施設は、身体機能を回復させるだけに留まらない、人生を前向きに生きていく力が湧き出るような所です。
「リハビリ理念」には＜夢のみずうみ村はリハビリをする施設です＞とあり、「リハビリとは、『生活できる能力』を確認なさることです。『生活できる能力』とは、身も心も生き活きする素だといえます。リハビリとは、こうした生きるエネルギーを再生産することです。訓練することが生き甲斐ではいけません。訓練してつかみ取った能力を使い、生きていることを味い楽しむことがリハビリの目的です。私たちはその目的を指向される方のお手伝いをさせていただきます。」とあります。
まさしく、住空間プロジェクトが目標とする「UD プラス」を体現している施設です。
住空間プロジェクトメンバー１１人で訪問し、ワークショップ形式でこの施設が利用者に提供する価値や意味についてまとめました。

■生きる力がみなぎる、まるで利用者のテーマパーク

今回の視察の視点は、建物・空間・家具・メニュー・自己管理・モチベーション・ことば・移動の8つ。＋ユニーク視点でご紹介します。

１．建物：お金をかけない。必要に応じて建て増しする。

外観からは先端的な取り組みの施設とは思えない、少し不思議な雰囲気です。カラフルな工場を建て増ししていったような印象で、整然と計画された施設ではありません。丘陵地形をそのままに、施設の拡大とともに必要な部分を付け加えていった結果だそうです。それが結果として、画一的でない、テーマパークのような変化に富んだ空間を作り出しています。

２．空間：入れ物は大きめの箱。その中を知恵で埋め尽くす。

玄関を一歩はいると、お台場と呼ばれる食堂兼ホールです。雑然とした田舎の家といった雰囲気は、「いかにも施設といった場所にしたくない」という考えの表れです。それでもしっかりと掃除は行き届いていて、人の手が掛けられている感じが伝わってきます。使用目的を決めてしまわない少し大きめの空間には、手づくりの工夫を凝らす余地が残されており、変化に自由自在に対応するそうです。

３．家具：とにかく安く、中古のものを使う。家庭的な雰囲気を作る。

家具はリユース品を活用しており、一つとして同じものがありません。まさにこの施設の基本姿勢「みんなちがって、みんないい」という言葉を象徴しているかのようです。お気に入りの椅子に座って、表記がなくても自分のものと覚えられる箪笥に所持品をしまって、その箪笥は伝い歩きの補助にも、みんなの作品の陳列棚にもなっています。計画しつくされた近代的な施設では味わえない、温かみと自由さを持っています。今ではご近所から寄付の申し入れもあり、ほとんど買わずに済んでいるそうです。

４．メニュー：言い出し人と賛同者がいて、経費が 3000 円以内だったら始められる。

ここでできるメニューはとにかく豊富。やりたいことを提案すれば、まずはやってみようということになるそうです。また、利用者の中には色々な技能を持った方がいらっしゃるので、利用者自身が指導者となるケースも多いそうです。あるご婦人は、半身麻痺になってこの施設に見えたのですが、リハビリによって自分なりの料理法を身につけて、今では大変有能な指導者になり、健常なときよりも生きがいを感じているとのお話もありました。

５．自己管理：自分でやりたいことを決める。

豊富に用意されたメニューから選ぶのは、利用者ご本人です。健康状態に配慮したアドバイスはありますが、介護度は関係なく、やりたいという意思がある人に対して、やれるようにスタッフが支援するという方針なのだそうです。この施設らしいなと感じたのが、「1 日ボーっとする。」ということもやりたいことの一つで、そんなメニュープレートもしっかり作ってありました。

６．モチベーション：楽しむためにユーメを稼ぐ。

以前、キッザニアの視察をしたことがあります。そこは子供たちが大人社会の体験を通して働くよろこびを味わい、「大人になりたい」との憧れを抱く場所でした。この夢のみずうみ村は、リタイアした方や障碍を持った方が、社会の一員として社会システムへの参加意識を持ったり、役割を担ったりできる、大人のためのキッザニアとも言える場所という印象を強くしました。

ここでは「ユーメ」という地域通貨が流通しており、色々なサービスやメニュー参加への対価として機能しています。ここで楽しむためには「ユーメ」を貯めなければなりません。食器を自分で片付けたり、施設のそこここにあるクイズに答えると「ユーメ」がもらえます。楽しみながらさらに「ユーメ」を貯めるために、自分で動くという仕掛けが利用者のモチベーションを引き出しています。

７．ことば：やる気にさせる、後押しをしてくれる。

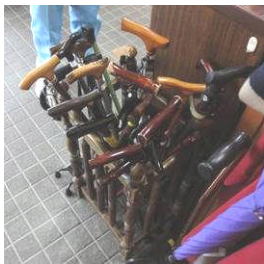
ここには気持ちが暖かくなることばが溢れています。腕のトレーニングマシーンには「手若丸」という愛称がついていたり、介護用の浴室には「寝太郎湯」という看板が掛かっています。「みんなちがって、みんないい」に代表されるように、自分らしく前向きに生きる気持ちを高めてくれる後押しをしてくれています。

８．移動：場所から場所への移動も意味ある時間にする。

移動の時間も無駄にはせず、例えばマイクロバスでの送り迎えも職員が行い、コミュニケーションの時間にしています。廊下には、ついつい歩いてしまいたくなるようにクイズやタイムトライアル、巡礼札所などが仕込まれて、達成感を伴う移動空間になっています。

以上のように、「生きていることが楽しい」と思える気持ちを高めることを徹底的に追求している。それこそがこの夢のみずうみ村の成功の秘訣だろうと思います。人の役に立つ、人から認めてもらえるということが人間の社会性であり、それを失うことこそが生きる意味を失うということにつながるのではないでしょうか。「生きていることが楽しい」という思いを持つことで、自然と「元気でいたい」「障碍を克服したい」という気持ちと行動につながる。それがこの視察から得られた「UD プラス」の意義だと思います。

■（番外）ユニークレポート「ここはまるでテーマパーク。キッザニアならぬ『シルバニア』！？」

何といってもこの施設をユニークにしているのは、「いかに利用者のモチベーションを高めるか」という仕掛けがいたるところに凝らしてあるということです。

『モチベーション』

杖なんてついている場合ではない。

と思えるように・・・

欲をかくことこそが人間らしい＝社会性

『食欲』

うまい飯を食いたい。

自分のことは自分で

片付けでもユーメ獲得

『金欲』

楽しむためにはユーメを稼ぐ。

ユーメを数える 楽しそう

説明を終えて 1000 ユーメ

作品を売る

説明担当も大役

『異性欲』

かっこつけたい。もてたい。

自分を表現　見てもらう

昔とった杵柄を披露して ヒーロー

じっくり話を聞いてもらえる

「お台場」では最大の楽しみのゲーム　ユーメ獲得もさることながら、異性との交流も意義深いか？？？

世界の UD 動向

■ View-Net 神奈川「取扱説明書のバリアフリー化事業」について

特定非営利活動法人神奈川県視覚障害者情報雇用ネットワーク（View-Net 神奈川）と IAUD 会員の株式会社日立製作所および日立アプライアンス株式会社の共同事業による「取扱説明書のバリアフリー化事業」について同社よりお知らせいただきましたのでご案内いたします。

この「取扱説明書のバリアフリー化事業」は各種製品のバリアフリーを進めるための一つの方法として、View-Net 神奈川が昨年度から積極的に取り組んできたものです。このたび同社の洗濯乾燥機を試行製品として、「音声テキストマニュアル」を作成し同社の関係のホームページにて公開されています。

このマニュアルは写真・図・表などを含んでいる通常の取扱説明書を視覚情報にたよらずに本文を読むだけで操作方法を理解できるように工夫・配慮して作成されたもので、取扱説明書の全文を画面読み上げソフトで読み上げ・操作しやすいテキストファイルとして提供し、視覚障がい者などが一つでも多くの製品を使えることを目的とするものです。同社ではこの活動を１社で囲い込むのでなく、広く他社も巻き込んで大きなうねりにしていきたいとのことです。

詳しくは以下のサイトをご覧ください。

・特定非営利活動法人神奈川県視覚障害者情報雇用ネットワーク： http://www.view-net.org/

・「音声テキストマニュアル」ダウンロード URL： http://kadenfan.hitachi.co.jp/manual/text/index.html

■「かわさき産業デザインコンペ 2010」作品公募のお知らせ

川崎市では、ユニヴァーサルデザインの普及事業の１つとして川崎市内の企業の協賛による応募作品の商品化を目指した「かわさき産業デザインコンペ」を実施しています。このたび、川崎市から本年度の公募情報をご案内いただきましたので、下記の通りお知らせいたします。

●コンペ概要

川崎市では、15 回目となる「かわさき産業デザインコンペ 2010」の作品を募集しています。
今回は「暮らしを支えるデザインを・・・」を全体テーマに９つの個別課題について、ユニバーサル性やエコロジー性にも配慮したデザイン提案を募ります。また、15 回記念として、デザインを通じてものづくりの楽しさを育むことを目的に高校生を対象とした特別部門を併催し、「暮らしを支える新しいユニバーサルデザインの提案」をテーマに、ものづくりやデザインに興味のある高校生から作品を募ります。

＜応募受付期間＞　2010 年９月 28 日（火）～10 月５日（火）当日消印有効

●個別課題／協賛企業

A ストレッチャーになる病院用ロビーベンチ／(株)キルト工芸　http://www.kilt.co.jp/
B 屋内外での使用にふさわしいユニバーサルデザインのエプロン／(株)タクエツ
C 御影石とガラスを融合した墓石／(株)冲セキ　http://www.okiseki.com/
D ＣＤジャケットのディスプレイツール／(株)モルテック　http://www.moltec.co.jp/

E カーナビ接続型「モーションメディア」を用いた「指さし」装置／(株)イクシスリサーチ
http://www.ixs.co.jp/
F 持ち運びが容易な回転式バーベキュー機／(株)日の出製作所 http://www.hinode-ss.jp/
G 幼児・児童向け抗菌ハウスウエア／(株)ユニオン産業 http://www.uni-project.co.jp/
H バルーン照明を用いた用途開発／(株)ライトボーイ http://www.light-boy.com/
I 電磁ロックを使った駐輪場用自転車ラック／東海技研(株) http://www.tokaigiken.co.jp

●賞／賞金：グランプリ 1点（副賞:賞金100万円）他 賞金総額200万円

■コンペ15回記念 特別（高校生）部門

テーマ：「暮らしを支える新しいユニバーサルデザインの提案」について
協賛企業 ：富士通デザイン(株) [参考]富士通キッズ「ユニバーサルデザインってなに？」
http://jp.fujitsu.com/about/design/kids/

●賞／副賞：最優秀賞 1点（副賞：パソコン）他
入賞作品については、プロのデザイナーと協力して見える化し展示します。

●資料請求／お問い合わせ

川崎市経済労働局産業振興部 新産業創出担当 松本 弘美
E-mail 28sangyo1@city.kawasaki.jp
TEL 044-200-2513/FAX 044-200-3920
〒210-8577 川崎市川崎区宮本町1番地

※詳細はホームページをご覧ください。 http://www.kawasaki-net.ne.jp/design/

【UD2010 ウォッチング】

●展示会場内で「浜松ほっとコーナー」（地元コーナー）を開設！

静岡県、浜松市、市民等で構成する浜松ほっとコーナー実行委員会では、国際UD会議の会期中、展示会場内に、静岡県内のユニヴァーサルデザインの取組や活動を紹介し、多様な方々との交流を図る場として、「浜松ほっとコーナー」（地元コーナー）を開設します。

国際会議には、約30カ国から1万人を超す参加者が見込まれており、併せて、広く静岡県民が参加できる公開シンポジウムやユニヴァーサルデザインを取り入れた新製品の展示会等も開催され、国内外に広く情報を発信します。

・**テーマ** ：市民力で“地域の絆”再生へ
・**開設場所**：アクトシティ浜松 展示イベントホール内
・**開設期間**：10月30日(土)～11月3日(水)
・**運営主体**：浜松ほっとコーナー実行委員会
（市民、市民団体、事業者、学識経験者、行政（県、浜松市））等
・**事業内容**：展示（展示ブース、パネル展示）
（予定） ユニバーサルデザイン学習・研究発表
ユニバーサルデザイン探検ラリー
市民パフォーマンス 等

※詳細については、随時、静岡県のサイトなどから情報提供される予定です。

●2002 年の横浜での国際会議をはじめ、翌年の IAUD 発足以来、IAUD の活動に関わってこられた細山雅一氏（当時パナソニックデザイン社、現在 IAUD 賛助会員）より「国際 UD 会議への期待」と題してご寄稿いただきましたので、以下にご紹介します。

■国際 UD 会議 2010 への期待

細山 UD-Unit 代表
細山 雅一

いよいよ 4 年に一度の国際 UD 会議が近付いて参りました。準備を進めている実行委員会始め関係諸氏には御礼と労いの気持ちをお送りしたいと思います。

さて今回の国際会議、二つの点で期待と楽しみを持っております。
一点目は、これまでの成果をどう社会に示すか。2002 年の横浜、2006 年京都での国際会議から今年で 8 年目、また 2003 年に設立した IAUD も発足から 7 年目を迎えました。生活者との対話を活動の根底に置き、UD 社会づくりへの研究や情報発信を行って参りましたが、その成果を世にアピールする絶好の機会としての期待は大きいものです。社会一般から見れば、中々IAUD の活動実態に触れるチャンスはありません。しかし、UD で社会を変えると詠った IAUD への期待は高く、発足以来 7 年の成果を存分に世に示し、活動の過程や成果をアピールしたいものです。会員の多くを占めるメーカーはそれぞれ独自の活動も展開し、商品やサーヴイスに活かしておりますが、IAUD 自体の活動も積極的に示したいものです。

二つ目は、7 年間の活動を総括し、このままの活動継続で良いのか、更に新しい活動を目指す必要は無いのかなど次の時代を見据えた方向の提起がされるのではとの期待です。これまで UD は不便さの改善、矛盾の解消などに力を注いで参りました。しかし、これからは、UD は当たり前の基準として捉え、新たな生活価値を生む視点やプロセスとして位置付けていいのではないかと私は思っています。「UD を極めることでこんな楽しく快適な暮らしが実現した」そんな提案を IAUD からどんどん発信したいものです。例えば余暇の UD プロジェクトが進めている「コマーシャルへの字幕表示」既に一部のメーカーは取り入れていますが、字幕表示が映像を遮り煩わしいとの意見も聞きます。３D‐TV などは字幕表示を最前面に配置することで映像への被りを最小限に抑える、また漫画の吹き出しの様に字幕（文字）が画面から飛び出すなど、エンターティメント性を損なわない方法で的確な情報保障と楽しさの両立が可能だと思うのです。生活者を第一に考えた提案をどんどん示していく集団。そんな活動領域へも広げていけたらと願っています。

2002 年に掲げた「人間のために、一人一人のために」を今一度想い起こし、会員の活動と成果、更に交流を楽しみ、これからの方向を考える国際会議に大いなる期待を持ちたいと思います。

以上

●併設展示会の出展者説明会が浜松で開催されました。

国際 UD 会議に併設して開催される展示会の出展者を対象とした説明会が、去る７月８日(木）の午後、開催現地のアクトシティ浜松にて開催されました。説明会には展示会の出展を予定している会員企業や団体の担当者が参加し、国際会議事務局からの概要説明と小間抽選会が行われました。
説明会は展示イベントホール向かいの研修交流センター会議室で行われましたが、終了後、展示会場となる展示イベントホールを見学し、出席者はいよいよ３か月後に迫った会議の実感が湧いたのではないでしょうか。

また、８月２日(月）には会議開催中、ランチタイムに開催される特別セミナーの企画に参加する企業への説明会が東京・八丁堀の IAUD サロンで開催されました。

●「IAUD アウォード 2010」の募集期間が８月末まで延長されました。

国際 UD 会議で発表を予定している本アウォードについては本誌の先月号でもご案内しましたが、応募締め切り日が８月２日(月)となっていたところ募集期間が延長となり、８月 31 日(火)に変更されました。今からでもまだ十分間に合いますので、日頃の UD に対する取り組みをぜひご応募ください。また、他薦でも構いませんので、先進的な取り組みをしている企業・団体・個人・グループなどご存じの方は、ぜひ、事務局までお知らせください。

詳しくは IAUD のサイトをご覧ください。

http://www.iaud.net/news-f/archives/1007/30-150000.php

●IAUD 理事会、UD2010 実行委員会関連

・７月 16 日(金)　国際 UD 会議 2010 第 18 回実行委員会が IAUD サロンで開催されました。
・７月 29 日(木)　IAUD2010 年度第２回理事会が大日本印刷株式会社の DNP 五反田ビルにて開催されました。

【編集後記】○毎日暑いですね。夜になっても気温が下がらずに、ぐっすり眠れない日が続いています。テレビのニュースでも連日、異常気象や熱中症の事件を伝えています。8月2日に気象庁が発表した「7月の天気」によりますと、東日本の7月下旬の平均気温は平年値より2.1度上回って、統計を始めた1961年以降で最高を記録する猛暑だったとのことです。東京の都心でも、1日の最高気温が35度を超える「猛暑日」が4日間も続き、30度を超える「真夏日」が22日もありました。それによるものか、東京で熱中症のために医療機関に搬送された人が1464人にも達しました。これは昨年実績の約4倍にもなる水準だということです。とにかく暑い7月でした。

7月中旬には、東日本（関東甲信、北陸、東海）や西日本（近畿、中国、四国、九州）で記録的な大雨が降りました。台風が上陸したわけでもないのに、集中的・突発的な激しい雨が襲いました。洪水や土砂崩れの報道が相次ぎました。災害を引き起こすほど激しくてゲリラ豪雨と言われる降雨、それに引き続く高気温を考え合わせると、ここ日本は温帯地域ではなくて熱帯地域ではないかとさえ思えてしまいます。ロシアでは記録的な暑さが襲い、中国では記録的な大雨による水害が発生、北極圏でも氷が融けているなど、世界的にも気候の変動・不順が加速しているようです。それらが私たちの日常生活にも着実に影響を与えています。昨今の天候は単なる異常気象なのでしょうか。それとも地球温暖化へ向かっていることの証しなのでしょうか。（矢辺）

○UDの基本は人の多様性を理解すること、というのはよく言われることですが、最近改めて、自分とは異なった考え方や環境にある人のことを正しく理解することが、いかに難しいことであるか痛感しています。それは例えばテレビなどのメディアを通して見聞きする場合など、自らの身の安全が確保され、理性的で冷静な判断が可能な場合は割合できやすいと思います。しかし、いくら自分は他者を理解して思いやりのある行動ができる人間だと自負する人であっても、あるいはそういう人であればあるほど、ひとたび当事者として利害関係や意見対立する状況に置かれると、たちまちそのような冷静な自分が失われてしまいます。人は考え方を否定されたり、意見に反対されたりすると、つい保身のため必要以上に相手に対して攻撃的になり、相手の話しを冷静に聞く耳をなくしてしまう傾向にあります。今月号の巻頭特集では国際会議での情報保障をテーマにとりあげましたが、そのようなケースは普段の何気ない人とのコミュニケーションの場でも頻繁に起こりうることなので、心して注意を払っていきたいと考えています。（蔦）

IAUD Newsletterでは、誌面を会員の皆さまのUDに関わる情報交換の場と位置づけています。
ぜひ、会員企業のUD商品開発事例やPJ/WGの活動成果事例等の情報をお寄せください。
また、国内外のUD関連イヴェント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。
ご連絡は、news@iaud.net へ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

IAUD Newsletter vol.3 No.5
2010年8月12日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事 務 局 :225-0003 横浜市青葉区新石川2-13-18-110
電話:045-901-8420 FAX:045-901-8417
e-mail:info@iaud.net
情報交流センター:104-0032 東京都中央区八丁堀2-25-9
（IAUDサロン） トヨタ八丁堀ビル4階
電話:03-5541-5846 FAX:03-5541-5847
e-mail:salon@iaud.net